

表象と言説

「表象」とは

「表象」とは、「何か」を用いて「あるモノ（対象）」を表すことである。用いられる「何か」は絵画や映画といった視覚的なイメージでも良いし、文学や活字メディアなどの言語的表現手段でも良く、また音楽などの聴覚的表現手段でも良い。一方、表される「モノ」は、具体的なものから抽象的なものまで様々であって、さらに言えば、それらの「モノ」が実在するものなのかどうかはそれほど重要ではない。

具体的な例を挙げてみよう。例えば「天国」。天国の様子を絵画で描写したり、物語で語ったり、音楽で表現したりすることは可能だろう。それらの「天国」をテーマとした作品が、「天国」の表象ということになる。また、「日本」の紹介ビデオを制作することを考えてみよう。京都や奈良の寺院、富士山、相撲に歌舞伎、都会のラッシュアワー、秋葉原の電気街、アニメや漫画などの映像がおそらく組み込まれることになるだろう。そのようなビデオ作品も「日本」の表象ということになる。

このように説明すると、「表象」とは、イメージやシンボル、記号のようなもの、もしくはそれらを用いた表現であると受け止められるかもしれない。基本的にはその解釈で間違いないが、「表象」という言葉が用いられる時、単なるシンボルや記号とは異なり、「誰」が「何」を表象しているのかということが、しばしば重要な問題となってくる。先の例で言えば、日本人が作った「日本」の紹介ビデオとアメリカ人が作った「日本」の紹介ビデオは、どちらも「日本」を表象する映像作品ということになるが、その内容がかなり異なったものになることは容易に想像できるだろう。

「表象」によって「あるモノ（対象）」に意味が生成するのだが、「表象」する側が、どの位置からどのような角度で対象に対して視線を投げかけているのかということが、生成する意味に大きな影響を及ぼしているのである。「他者」と「表象」という言葉が親和性が高いのは、表象という行為が本質的に自分でない「誰か」や「何か」、すなわち“他者”を対象としているからに他ならない。勿論、「自己」表象もある。日本人による「日本」の紹介ビデオなどが、その例として考えられる。しかし、そのような自己表象は他者の視線を迂回して意味を生成していることが多い。外国人の望む日本像（寺院や歌舞伎）であれ、それを是正する日本像（ラッシュアワーや電気街）であれ、自己表象の中には他者からの視線（他者表象）が常に潜んでいるのだ。

「言説」とは

「言説」とは、「言葉」によって「あるモノやコト（対象）」を説明したり、言い表したりすることである。よって、「言説」とは言語領域において見られる「表象」作用ということになる。「表象」がしばしば個々の作品やジャンルを想起させるのに対して、「言説」はより総合的な作用を意味することが多いが、両者の意味の射程は極めて似通っており、文脈によっては互いに交換可能な場合もある。しかし、「言説」は単なる言語表現に止まらない。「言説」は制度や権力と密接に結びつき、ある対象に特定の意味を付与するだけでなく、その「対象」さえも創造することがあるのである。

「表象」にも対象（他者）に新たな意味を付与することでそれを創造する性格はあるが、「言説」は権力と結びつき制度的に対象を創造し、その結果対象を支配さえするようになる。言い換えれば、「表象」が他者に対する一種の思考様式にまで昇華すると、それはもはや「言説」として機能するようになる。そして、この思考様式としての「言説」は、「主義」や「理論」などとは異なり、多くの場合、意識化されない。

「言説」についての研究で最も良く知られたものが、サイドによるオリエンタリズム（東方趣味；東洋研究）批判である。彼によれば、「オリエン（東洋）」とはヨーロッパによって発明されたエキゾチックな他者であり、「オリエンタリズム」とは、ヨーロッパのオリエンに対する言説的な関わり方、すなわち、オリエンという「他者」を創造し支配し、そうすることでオキシデント（西洋）とは何かを同定する方法である。

「オリエン」は純粋な地理的空間ではなく、観念的空間であるが、単なる空想の世界ではない。「オリエン」に対応するリアリティは確かに存在し、それに対する理論と実践の積み重ねがオリエンタリズムを形成してきた。西洋と関わるあらゆる対象（他者）は、オリエンのように言説化されると言うことで良く、オセアニアもその例外ではない。例えば、西洋との接触がオセアニアにとって「破壊的な衝撃」であったと見なすような歴史観なども一種の言説と言って良いだろう。

表象と言説と文化アイデンティティ

文化アイデンティティは、「名付け」と「名乗り」の関係性の中で構築されることは既に述べた。この相互作用を通して作り出されるのは「先住ハワイ人」といった単なる名称だけではない。そこでは「ネイティブ・ハワイアンとは誰か」とか「ハワイ人らしさとは何か」という問題が問われつつ、アイデンティティが構築されることになる。

こうして構築されるアイデンティティには、表象という行為が実際に大きく関わっている。「訪れる者に微笑みながらレイを掛け抱擁してくれる南海の島民」という使い古された観光向けのハワイ人のイメージは、他者表象に他ならない。そのようなイメージに対して、現在のハワイ人は激しく抵抗し自らを表象すべく声を上げるのである。また、「名付け」と「名乗り」の関係は、他者表象と自己表象のそれと相似であり、前者は後者に包含されると言うことで良い。

しかし、「名付け」が、“one-drop rule”や「血統量定（blood quantum）」といった規則に基づいてなされると、それはもはや表象などではなく、植民地主義的言説として“名付け”られたハワイ人に対して支配的な権力を振るうようになる。制度的に「ハワイ人」が規定される状況において、単なる表象の問題として“名乗り”返すだけでは自らのアイデンティティを回復することはできない。ここに至って、文化アイデンティティは、文化表象の地平を超えて争われる文化政治学の問題となる。

このように考えると、「表象」や「言説」は、文化アイデンティティについて考える時、重要な概念となってくることが分かる。両者の概念を良く理解しておけば、ハワイ人のアイデンティティについての今後の議論がより明確になるとと思われる。